

行く先を知らずして

講演	内村 公春〔うちむら・きみはる〕
講師紹介	社会福祉法人 慈愛園理事長

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。

信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かります。

信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。

この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。

(ヘブライ人への手紙 11章1―3節、8節、13節)

はじめに

ただいま紹介にあずかりました内村と申します。1972年文学部の卒業です。卒業後は、熊本のキリスト教主義学校である九州学院に勤め、最後は学校長・院長として働き、今年の3月、定年退職しました。そしてご紹介のとおり、この4月から同じ熊本にあるキリスト教主義の社会福祉施設慈愛園で働いております。

最近の同志社との繋がりを言いますと、このキリスト教文化センターが主催されています「熊本キャンブ」という企画がありますが、そのお手伝いをさせていただきました。また、熊本ではYMCAやプロテスタントの教会、キリスト教学校などが中心となり、毎年1月30日の早朝、熊本市内西部にある花岡山の山上広場で早天祈禱会を開いております。ご存じだと思いますが、この場所で、1876(明治9)年の1月30日(29日という説もありますが)、熊本洋学校の35名の有志たちが、キリスト教信仰の誓いである奉教趣意書に署名し、そのことによってこの日本を変革する誓いを立てたのです。その後の激しい迫害のなかで、このメンバーの多くがその後同志社に進学し、「熊本バンド」と呼ばれることになります。それを記念する早天礼拝を毎年行っているのです。この礼拝の奨励者として、過去、多くの同志社の先生方に奉仕していただいております。来年の1月30日の記念会は、139回目になります。こうしたことで卒業後も同志社との結びつきができ、感謝しております。今日はこうして、「同志社スピリット・ウィーク」にお招きを受け、奨励させていただくことを大変光栄に思います。

熊本洋学校の教育

私が熊本から今日来たこと、そして「熊本バンド」のメンバーが同志社で大きな役割を果たしたことを思い、この機会に改めて「熊本バンド」を生み出した熊本洋学校の教育について、振り返ってみたいと思います。

さて、熊本バンドに連なる若者たちを教育したジェーンズは当時33歳。熊本洋学校に着任した当時の熊本の印象を、こんな風に述べています。「熊本城下の人々は、これまで港々で見たどの人々よりも、哀れで貧しげに見えました。そのどの顔にも絶望的な表情がうかがわれ、心が痛みました」(田中啓介他『ジェーンズ熊本回想』熊本日日新聞社 1991年)。

ご承知のとおり、このころ羽振りが良かったのは薩長土肥、つまり薩摩・長州・土佐・肥前という四つの藩であり、それに対し熊本は保守的であるだけでなく、派閥に分かれ内部で対立を繰り返しておりました。一つは公武合体の流れを汲む学校党、そして横井小楠の弟子たちが中心となった実学党、さらに攘夷の精神を極端にもった神風連などです。

さらにこのジェーンズが来日する前日には、それまでの日本の支配制度の根本を覆す廃藩置県も行われました。つまり、江戸時代の封建制を支えていた仕組みがなくなり、新しい社会の仕組みのなかで生きることが要求されたのです。だから今まで大事だと思っていた価値観が崩れていく状態を目にし、人びとが大きな不安を抱いて生きた時代でもあったのです。

こうしたなかで、1870(明治3)年、当時の熊本の指導者たち、特に横井小楠の流れを汲む実学党は、「肥後の維新」と呼ばれる藩政改革を行います。その改革の目玉となったのが、西洋人教師による西洋の高等教育を行う「熊本洋学校」の設置でした。それを提案したのは、留学経験のある横井小楠の甥・横井太平でした。そしてその教師として選ばれたのがジェーンズだったのです。

ジェーンズは、米国土官学校で学んだ教養と教授法を使って洋学校で教えました。そしてジェーンズ自身語っているように、それは「奇跡的な成功」を修めたのです。

その教育の特色を、ジェーンズ研究者でもある田中啓介氏は次の4点に要約しています。

- (1) 全寮制による24時間教育によって、知育ばかりでなく徳育にも重点を置く、全人格教育を目指したこと。
- (2) 全教科をジェーンズ一人で担当し、通訳を通さず、すべて直接英語による教育を目指したこと。
- (3) 厳格な点数主義・厳罰主義を貫き、指名されたときの答えや試験の成績によって席やグループを入れ替え、生徒間の学問への競争心を組織したこと。
- (4) 高学年の成績優秀な生徒を低学年の指導にあたらせ、担当する生徒の指導性を高めるとともに、生徒間の自助・相互教育のシステムをとったこと。

以上の四つですが、その他、田中啓介氏は挙げられなかったのですが、日本で最初の男女共学を実施したことも、その特色と言えるでしょう。

さて、こうした教授法には、出身校であるウエスト・ポイント士官学校の教育、「真のジェントルマン」として道徳意識を説き、人格教育を行ったラグビー校トマス・アーノルド校長などの影響もありました。ジェーンズのこんな言葉が残されています。「修身の授業を行うなどナンセンス、学校は文物を学ぶところで、教師自らが生徒達に健全な道徳の見本を示せば済むことである」(石井容子『熊本洋学校教師 Capt. L. L. Janes研究』佑啓堂 2013年)。

(4)に上げた特色に関して付け加えれば、ジェーンズは、「自助(self-help)の原則」を生徒達に伝えています。つまり「完全に習得したものは全て人に教えることができる」という原則です。だから、後には優秀な上級生に下級生を教えさせ、競争主義も取り入れました。なかでも特に心を砕いたのが、「徹底的な基礎の定着」ということでした。こうしたジェーンズの教育に、生徒たちは必死で努力し、学びを深めていったのです。その結果、本当に優秀な生徒たちが育っていったのですが、その反面、競争主義によって落伍していった生徒も多かったことも忘れてはならない事実です。

さて、ジェーンズが生徒たちに語った言葉が残されています。「急いで、高い山に登つてはならない。麓から、一歩々々を登らねばならぬ。一足誤ると、顛落する」。「予は教へない。汝等が考へねばならぬ。予は行く前だけを示す」(渡瀬常吉『海老名弾正先生』大空社 1992年)。

立身出世の道を求め、政治家や役人になってこの日本を変えたいと考えている生徒たちに対して、ジェーンズは、「日本の国を富ますことは、大変大切であるし、また国を富ますならば、その富ます人自らは、自分も富み、また地位も与えられるであろう。しかし、この国にとって更に必要なことであって、自分は富んだり、名誉ある地位は得られない犠牲の途がある。それは、教育と宗教によって、この国に仕えることである」と語りました(三井久「同志社と熊本バンド」『熊本バンド結盟百三十周年記念誌』熊本バンド記念事業実行委員会 2006年)。

生徒たちにはなぜ、これだけ一生懸命に学んでいったのでしょうか。確かに時代の流れに遅れたくないということもあったでしょう。しかし、西洋の新しい知識の学びをとおし、生徒たちは「未知の世界、未知の考え方」に触れ、まさに目を開かれる喜びを味わっていったことがその理由でもあるのです。そしてこれこそが、今最も必要とされる「教育の原点」と言えるのではないのでしょうか。

ところで、ジェーンズの教えの根底には、イエス・キリストへの熱い信仰がありました。ジェーンズは『熊本回想』のなかで、このようなことを語っています。

人間を励まし、生きる意欲を奮い立たせてくれるのがキリスト教です。人が人類のために尽くしている姿こそ、神のご意志なのです。今日の私たちがおかれている状況、つまり私たちを苦しめ、より高い理想とよりよい状態へ進もうとする意欲を失わせるものについて、私たちがよく学び、人間愛の精神を胸にしっかりと刻み、この社会の最大限の幸福のために身を捧げる必要があるのです。こうしたジェーンズの教えが、洋学校に集まった若者たちをさらに高い理想と信仰に向かわせたのだと言えるのです。

こうして、1876年1月30日、このジェーンズの教えを受けた35人の青年たちが、熊本市の西部にある花岡山山上に集い、キリスト教によって、この社会を変革することを誓ったのでした。そしてこのことは、日本が二つに分かれて争った西南戦争の前の年であり、武力よりも言葉の力が社会を動かしていく時代へ移っていく時期でした。

ご存じのとおり、洋学校が閉鎖となる原因を作り、激しい迫害を受けたこの若者たちは、ジェーンズの勧めによって同志社に進学します。そして、それぞれの理想に向かって努力を重ね、教会のリーダーとして、あるいは社会のリーダーとして活躍していったのです。

最後に

ところで、私たちはここ数年、信頼していたものが次々に崩れていくことを経験してきました。世界はグローバル化の流れのなかで、さらに混迷を深めているように思えます。しかし、考えてみればいつの時代も、厳しい現実が存在するのです。熊本バンドの若者たちの場合もそうでした。だからこそ、イエス・キリストの導きで、「一歩一歩、目標を目指し」歩いていくことが必要なのです。

もし今、熊本バンドの若者たちに学ぶとすれば、何よりも洋学校での学び、さらに同志社での新島襄校長の人格教育のなかで、たとえ困難な道が広がっていくとも、世のなかのために生きようとして歩いていったことです。

この「同志社スピリット・ウィーク」をとおり、改めて「同志社の原点」を考えながら、私たちもまた「地の塩、世の光」としての働きを目指して歩いていきたいと思います。
以上で、お話を終わらせていただきます。

〔参考文献〕

田中啓介『熊本英学史』本邦書籍 1985年

田中啓介他『ジェーンズ熊本回想』熊本日日新聞社 1991年

石井容子『熊本洋学校教師 Capt. L. L. Janes研究』佑啓社 2013年

『熊本バンド結盟百三十周年記念誌』熊本バンド記念事業実行委員会 2006年

花立三郎『明治の青年 上・下 熊本の維新に生きた若者たち』熊本日日新聞社 2000年

2014年10月28日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録